
魔王の息子が勇者様！？

白々しい黒子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の息子が勇者様！？

【Nコード】

N9774Z

【作者名】

白々しい黒子

【あらすじ】

人間と魔族の戦争からはや千年、表面的には平和な世界で魔王の息子、グレイ・アッシュフォードは膨大な知識を得るため人類最高峰のフォートレス魔術学院に入学した。特別試験でドラゴンの鱗を持ち帰り合格したが魔力検査では最低ランクのFだと発覚し、周りから「まぐれ龍殺し（ドラゴンキラー）」と呼ばれる。入学してから二年目の春、勇者の儀式で何故か勇者に選ばれてしまい！？世界の存亡をかける大スペクタクル、今ここに開幕！

（なお一部内容があらすじと違う場合があるのでご了承下さい）

魔王の息子（前書き）

えーストーリー上いろいろ問題があったので少し練り直して投稿します……

本当さあーせんでした！

m (——) m

魔王の息子

太陽がサンサンと照らし、新しい季節を喜ぶように小鳥達がさえずり、色とりどりの花が咲き乱れる。

季節は春、魔術都市ミネアポリスにきて二年目の春になる。俺、グレイ・アッシュフォードは綺麗に切り揃えられた芝生の上で昼寝を満喫していた。

「坊っちゃん！起きてください！」

煩い蟬がいるようだが無視無視、こんなほかぼか陽気に起きてなにかいられるか！しかも、夜遅くまで読書してたから眠いんだい！

「ZZZ……」

「坊っちゃん！」

「むにやむにや……」

「坊っちゃん！起きてください！坊っちゃん！」

「……」

「えい、こうなれば最終手段！………かぶ」

蟬は俺の首筋に勢いよく噛み付いた。

「痛くて〜〜！」

「やっぱり坊っちゃんの血は最高ですな！ぐへへ……ゲプ」

「……おい」

「おや？やつと起きましたか坊っちゃん、何か問題でも？」

「何か問題でも？じゃねーよ！毎回毎回人の血を吸って起こすな！」

「毎回毎回起こしても、起きない坊っちゃんが悪いのです。」

「そういわれるとそうなんだが……だからって血を吸う事はないだろ！噛み付くだけで十分だろ！」

「それはヴァンパイアの性ですので、仕方ありませんね！」

「開き直りやがった！」

「坊っちゃんの血が美味しいのが悪いのですぞ！」

「人の所為にまでしゃがった！」

「まあこのコントは終わりにしまして……」

「コント呼ばわり!?」この変態蝙蝠の名はセバスチャン通称セバス、俺のお目付け役兼変態だ。変態なのは既におわかりだろう、ことあるごとに俺の血を狙ってきやがる変態。変態ヴァンパイアだからといって俺の血に対するこだわりが変態過ぎる。まあ、他の能力は一流なんだが、変態が全てを帳消しにしてしまう。「こんなお姿を見られたら魔王様がお嘆きなされますよ?」

「いや、あのクソオヤジが悲しむ姿が想像出来ないんだが」

「……まあそれはさておき、魔王の息子たるものもう少ししっかりして頂かないと。前々から言ってますが……」

俺はセバスの説教を聞き流しながら、この世界を思い返してみる。

そう、俺はこの世界、

アスペクトを恐怖に陥れると人間界で言われる魔族の王、魔王の息子だ。しかし、魔王と言えど今は大した力はない。千年前の魔族と人間の大戦争が起こった。原因は魔族が人間を見下し、人間が魔族に恐怖し生まれいた軋轢が爆発したからだ。魔族と人間はたびたび戦争をしていたがゴブリン族やオーク族、人狼族など魔族の一部だけで収まっていた。しかし千年前はなぜか全魔族まで広がり世界規模の戦争になった。魔族三百万と人間一千万が入り乱れ、双方に甚大な被害をだし泥沼の戦いになると思われたが終結はあっさりとしたものだった。

魔族の王、魔王と、神から信託を賜ったと言われる人間の勇者の一騎討ちが行われたからだ。お互い疲弊し種族が絶滅するまで終わりそうにない戦争に終止符を打つためにはそれしか無かったのだ。

フォゲール草原で一騎討ちは執り行われた。

魔王と勇者の戦いは熾烈を極め、最終的に相討ちになった、しかしフォゲール草原数十キロに渡るに深い溝を残した。それを人間は世界

の傷と言いつこから東側が人間領、西側が魔族領とし世界の傷から半径十キロを不可侵領域とした。

そして人間はまた戦争が起きても戦える戦力を保持するために魔術都市ミネアポリスを建設、未来を担う子供達の為と言う建前でフォートレス魔術学院を設立し戦力増強を図った。

一方魔族は、魔王が死に息子が後を継いだが、幼いため権力争いが起こり内乱状態に入った。内乱は二百年ほど続きそれぞれの種族が決まった場所を統治し、表面的に魔王一族が総括をする事でことなきをえた。

そして、魔王一族は名ばかりの存在になった。

「セバス、説教はもう終わったか？」

「説教とはなんですか！説教とは！そんなことでは将来立派な魔王になれませんぞ！」

本当にこいつは煩いな

「別に魔王になるつもりはないし第一、後継者はアル兄さんだろ？」

「確かに第一後継者はアルフォンス様です。しかし魔王の息子足るもの下剋上するくらい的心意がありませんと！」

「だって面倒くさいじゃねーか政治とか、家でずっと読書してる方が楽しいし、アル兄さんに任せれば安心だろ？」

「確かにアルフォンス様なら安心でしょう、しかしだからといってこの体たらくは見過ごせません。何度授業をサボるつもりですか！」

「そんなにさぼって無いって、週に二三回程度だろ？」

「週に二三回が多いと言っているのです！」

「だって学ぶ事が無いんだから仕方がない。学問は城で殆ど学んだし、魔術はアレだし……」

「確かに学問は城でみっちり教えて込みましたし、魔術はアレです

が青春を謳歌するのも悪くは無いのでは？」

「そうはいつでもエルフやドワーフじゃあるまいし、人間と仲良くして魔王の息子だつてばれたらヤバいじゃねーか」

「確かにそうですね」

セバスは苦笑した

比較的平和なこの世界で魔族でも人間と交流がある種族がある。それがエルフ族とドワーフ族だ、エルフは元々人間と友好を深めたいと思っっているのが多く、人間からも温厚で魔術に長け、しかも魔族に珍しく美形が多いので結構人気がある。ドワーフは身長はせいぜい百五十センチほど、腕が人の腰周りほどありながら驚くほど繊細な指使いを得意とする。物作りに長け、武器作りで右に出る物はなく、人間の鍛冶屋にはドワーフに弟子入りするものも珍しくない。頑固者が多いが探求心が強い為、人間の柔軟な発想力に興味を惹かれ一緒に行動するのも多々あるそうだ。

「エルフはいいよな〜美形が多くて」

魔王一族は何故か人間とよく似ている。身長も外見もそっくりだった。俺なんか黒い髪に黒い瞳、中肉中背の平凡野郎だぜ？アル兄さんなんか金髪、碧眼、高身長で強くてイケメンとくる。まったく不公平だろ！まあ腹違いだから仕方がないか……

「無い物ねだりはよくありませんぞ〜」

「まあな」

「ミネアポリスに来たのも社会勉強なんですからね？」

「社会勉強ね〜」

一応名目としては、魔王の息子として検分を広めるための社会勉強だが、はつきり言っただのいい厄介払いだ。何故かって？そりゃ跡取り問題があるからだ、殆ど発言力の無くなった魔王の跡取り問題なんか魔王一族にとって迷惑でしかない。こっちが魔王になるつも

りはなくても、ダメな奴を魔王にしてよりやりやすくしようと考え
る奴らが出てくるかもしれないからな。まあ俺にとつてもありがた
い事だったからな喜んで了承した。俺はミネアポリスのフォートレ
ス魔術学院に来るのが夢だった、とある理由で魔術が殆ど使えない
が魔術関連の書籍は世界一を誇り、最先端の魔術に触れるにはフォ
ートレス魔術学院はとて魅力的だったからだ。しかし学院生活は
意外とつまらなかった。授業はセバスが教えてくれた範囲で卒業レ
ベルまで達していたためつまらないし、独学で勉強してる方が効率
的だったからだ。

魔術実技は出来ない事を習ってもやる気が出ない。

だから自然とサボる様になってしまった。しかし落第にならないよ
う試験で結果を残しているから教師も厳しく出来ないみたいだがな。
授業をサボるからと言って学院に来ない訳ではない、ほぼ毎日図書
室に行き独学で学んでいる。フォートレス魔術学院の図書室はもう
図書館と言つて過言でない、十万冊以上のありとあらゆる書籍が敷
き詰められ圧巻としか言い様がない。本の虫の俺にとってここは天
国みたいなもんだからな。だから俺はやることはやっている。俺マ
ジ偉い。だからたまに昼寝するおけー？

「しかし今日は勇者の儀式なのですぞ？」

セバスは珍しく好奇心を顕にして言った

「なん……だと！それを早く言え！」

俺は直ぐ様跳ね起き、急いで儀式会場に向かった

魔王の息子（後書き）

まだまだ続く！

勇者の儀式（前書き）

二回目

勇者の儀式

勇者の儀式……

その名の通り、勇者に関する儀式だ。

千年前に人類を魔族の魔の手から守った勇者が死んだ事を悼み、勇者の墓標が建てられた。

墓の上には勇者が神より授かったと言われる勇者の剣、聖剣エクスカリバーが突き刺さっている。

何故かといわれるとよくわからないが、勇者の存在を伝説でなく実際にいた人だと知らしめる為だったらしい。

効果は抜群で連日連夜参拝客がひっきりなしに訪れたそうだ。

しかし馬鹿な奴らがいたもんで、勇者の剣を引き抜こうとしやがった。

しかしいくら引つ張ってもびくともせず、次第に三人、四人、十人掛かりでかかっても抜けず、お手上げ状態。その噂話を聞きつけ力自慢の人間が挑戦するようになり更に参拝客が増えが、しかし誰も抜く事が出来ずにいた。

そんな時、ミネアポリスに危機が訪れた。魔力を暴走させた邪龍が街を襲って来たのだ。

まだミネアポリスには戦う為の戦力が十分でなく、人々は次々と蹂躪されていき阿鼻叫喚に包まれた。

そんな中、一人の青年が勇者の墓標に訪れた。

そして勇者の剣に手を掛けた。

すると抜けない筈の勇者の剣があっさりと抜け、眠っていた魔力が放出され、青年を包み。勇者の剣の力を借りて見事邪龍を退けたそうだ。

そして勇者の再来と謳われた。

青年は二代目勇者と名乗りミネアポリスに降り掛かる災いを次々と

退け神格化されていった。しかし老いには勝てず、あっさりこの世を去ってしまった。すると勇者の剣はいつの間にか消え、初代勇者の墓標に舞い戻っていた。その噂が街中、いや人間世界各国に広まり、数えきれない人が訪れた。

もちろんその中には勇者の剣を引き抜こうとする者が殆どでミネアポリスは対応に追われた。

そのためミネアポリスは勇者の墓標を中心としてを未来を担う子供達の為と言う建前でフォートレス魔術学院を設立し市民を退け、なんとか騒ぎを治める事が出来た。

しかし市民からの不満も多く、ミネアポリスはフォートレス魔術学院の生徒にのみ、勇者の剣に立ち向かうのを許すと宣言した。そのため人数制限が出来、世界各国選りすぐりのエリートが集い、自然と戦力増強され一大都市となった。その間にも何故か運良く勇者が現れ、大洪水、大飢饉、魔獣の大量発生など、様々な厄災からミネアポリスを守った。

そしてフォートレス魔術学院では履修期間三年のうち、二年目の春に執り行われる様になった

勇者の儀式（後書き）

指が

勇者の儀式2（前書き）

新しい話です。

勇者の儀式2

「ふう、間に合ったか…」

俺は儀式会場に到着し息をついた。

既に殆どの生徒が集まり、教師の指示に従いながら並んでいた。

俺がいるのは巨大なドーム場の建物、通称「勇者の神殿」。外から見るとドームの天辺にポールが設置されている。ドームは強力な結界が張られており、剣を盗もうとする輩から剣を守っている。

抜けないんだから結界なんて必要無いはずなんだがな。

そして勇者の儀式以外で開放される事はまずない。そしてドームの中心には勇者の墓と聖剣エクスカリバーが突き刺さっている。実物を見るのは初めてだが、刃渡り一メートル程の両刃の剣、余り凝った装飾品無く剣の中心に拳程もある漆黒の魔石がはめ込まれているのが唯一の特徴だ。

魔石とは宝石と同じ様に長い年月をかけて生成されるが、大気中の魔力が染み込んだ物を言う。

魔石は自分の魔力を透して魔法を発動する事により、より強力な魔法を使う事の出来る増幅器ブースターの役割を担う。

しかし魔石はなかなか生成されず、直径二三センチの物が当たり前しかも一つの値段が平民の年収に匹敵するといふのだから驚きだ。だから拳程もあるあの漆黒の魔石はいくらになるのか見当もつかない。

そうそう、前置きが長くて忘れてたが勇者の儀式についてだ。勇者の儀式と銘打ってはいるが内容はいたって簡単。二年生五百人全員が順番に勇者の墓に刺さった聖剣エクスカリバーを引き抜けるか試すだけだ。一人辺りの制限時間は無いが一度試して引き抜けないければ一生抜けないのでそんなに時間は掛からない……はず。

「まったく、坊っちゃんまが早く起きて下されば走らずに済んだのですぞ」

「ハイハイ、ワカリマシタスイマセン」

「全く気持ちが籠もってないじゃないですか！大体坊っちゃんときたら……」

ああ、また始まったよセバスの説教、どう切り抜けたものか考えていると……

「おい！グレイ！こっちだこっち！」 ナイスタイミングで助け船が出た

「おお、ライル久しぶり！」 俺はわざとらしく、返事をした

「セバス分かってるな？」

セバスに小声で忠告する。

「……御意」

セバスは不服そうに頷いた

セバスと会話しているのを見られるといろいろ不味いからだ。

何故かというと魔獣を使役する魔獣遣いは珍しくないが、魔獣は言葉を話せないのだ。セバスは魔族の中でも上位に所属し、上位の魔族を使役するのはとてつもなく難しく、しかもアレな俺が使役出来

るわけがないのだ。まあセバスは使役している訳ではないのだが、世間的に下級の魔獣メイズバットと言う事で通している。

魔獣や魔物、魔族の区別は追々説明するとして、セバスのレベルを気付かれない為の手段として人前での会話は極力避けている訳だ。まあセバス自身も気を遣って魔力も気配も完璧にコントロールしているから殆ど心配はいらなないがな。

「何してんだよ！早くこつち来いよ！」

「ああすまんすまん、今そつち行く」

俺は急かす声に引かれて駆け足で向かった。

「つつたく、 그레이のせいで最後尾になっちまったじゃねーか！」

「まあまあ、 그레이が来たこと事態珍しいんだからよしとしようよ」

「そうだな、さぼり魔のこいつが来たこと事態有り得ないもんな！」

「そこまで言つてないよ。逆にこうゆう行事「だけ」はちゃんと参加するんだから」

「……お前ら言いたい放題言いやがって」前者が俺を呼んだライル・レオンハルト、短髪赤毛で引き締まった筋肉が特徴の下級貴族の脳筋野郎だ。そして後者がスタイル・オルコット、眼鏡で童顔、女と間違えられるのが日常の中級貴族の美少年野郎だ。

「なんかスゲー馬鹿にされた上に雑に扱われた気がしたんだが……」

「僕も同感だね……」

「……気のせいだろ」

二人にジト目でにらまれたが気にしないでおこう。

こいつらは一年生の頃からの付き合いだ。入学試験で一騒動起こした俺は、周りから注目はされるが魔王の息子だとばれない為に人と距離を置いていた。しかし、当時ライルが何故かしつこくちよっかいを出してきて業を煮やした俺はライルと殴り合いの喧嘩に発展し二人とも二週間の謹慎をくらった。それから不思議とつるむようになり、ステイルがいつの間にかいてそれが日常となり、二年生になっても続いている。

「まあ週の半分はさぼってるけどね？」

「二人で過ごす事の方が多しな(笑)」

「回想にツッコミいれやがって……」

そっちがその気ならこっちだって考えがあるぜ！

「……まあ夫婦の甘い一時」を邪魔をする程不粋じゃないんでね」

「ブッ！」

「……」

ライルが咳き込み、ステイルが口をパクパクさせた。しかしすぐ俺に返り

「誰が夫婦だ!!」

と突っ込んだ。

「ほら息もぴつたり」

俺の発言に二人は二の句を言えずに黙ってしまった。

ステイルがあまりに美少女な為、ライルと一緒にいるとカップルにしか見えず実際にカップルだと思っているのも少くないらしい。

(主に女子が)

半引きこもりの俺でさえ耳に届く始末だ。巷ではライル×ステイルの小説が出回っているそうだ。タイトルは確か……「美少女と野獣」

「誰が野獣だ！」

「誰が美少女だ！」

いつの間にか復帰していた二人に再度ツツコミを入れられた。

「すまんすまん、間違えた美少年と野獣だった」

「「尚更悪いわ(よ)!!」「」
よくハモるなこいつら

「そんな事言われても俺が言い出した訳ではないし、非難される憶えが無いんだが？」

「それはそうだけど(よ)……」

ふと、周りを見渡すと俺たち三人に視線を向ける者達がちらほらいた。

「周りの奴らが注目してるぞ？」

「「!!!」「」

まああれだけ騒げば嫌でも注目されるわな！

「それに仕掛けてきたのはそっちだろ？」

「悪かったから！だからその話は勘弁してくれ……」このネタで周りからよく弄られたのだろう。ライルが手を合わせ謝った。

「ホント、グレイは意地悪だよね」

ステイルが頬を膨らませながら文句を言うが、美少女…いや美少年の為全く迫力がない。

「ただ僕たち二人を注目してると言うより、まぐれ龍殺し（ドラゴンキラー）の方が注目を浴びているんじゃない？」

「だな！」

「だから龍殺しなんてしてないから！もう1年も前の話を掘り返しやがって……」

俺は筆記試験が面倒くさかった為に特別試験を受けた。普通の学院にはこな制度はなく、フォートレス魔術学院のみが採用している。理由としては「学力で計れないものもある」と言うことらしい。

内容ははつきり言って何でもあり、自分が如何に凄い奴かを学院に知らしめればいい。大魔術を披露するもよし、上位の魔獣と契約し報告するもよし、魔術論文を発表するもよし、昔なんか新しい魔術を開発して発表した奴なんかいたらしい。

俺は元々筆記試験を受けるつもりだったが、特別試験の存在をしり真っ先に飛び付いたのだ。だって試験勉強とか面倒くさいじゃねーか、独学で学ぶ分は楽しいからいいが、試験勉強なんて範囲の暗記さえしてればいいんだし、実用性に掛けるんだよな筆記試験は。

そして俺が特別試験に決めた内容がドラゴンの鱗を持つてくるという至ってシンプルなものだった。

小さい頃からよく背中に乗せて遊んでくれたグレートドラゴンのじいさんの所に行き、一枚三十センチもある鱗を一枚くれと頼んだら十枚以上くれて袋がパンパンになりながらも持ち帰り、特別試験でそれを提出した。

そしたら問題が起きた。ドラゴンは魔族の中でも最上位に位置する強さで、しかもグレートドラゴンはその中でも最強の強さを持つ、その上ドラゴン族の里は魔王領の奥深くにあり並みの人間では立ち入る事さえ困難を極める。さらにさらにグレートドラゴンのじいさんは千歳を超えていてその強さは伝説の邪龍に匹敵するのを俺は失念していた。

だってもうヨボヨボのじいさんだったし、威厳なんて無かったんだ

もん。

試験官達からはどうやって手に入れた！魔王領に勝手に勝手に入るなんて！命が惜しくないのか！等々質問攻めをくらい後半は説教だったが、その声を無視し「結果は？」とだけ聞いた。

試験官達は 買った物ではないか？とかよく作られた物では？とか協議していたが、じいさんの鱗をかうとしたらそれこそ王族じゃないと買えない値段だろうし、作り物にしても千歳の魔力が染み込んだ鱗は作れるはずがない。

てな事で、不信がりながらも合格を貰ったわけだ。証拠品として回収されたが……

まだ家に十枚近くあるしその辺は問題ないのだが、あれ絶対証拠品と言っより戦利品を見る目だったよな。試験官が持ち逃げとか、まあ受かったからちゃんと学院に知らされてるはず……

しかし、騒動はこれで終わらなかった。

たまたま同じ受験生が俺の特別試験の一部を見ていて周りに広めたのだ、そして噂が噂を呼びいつしか龍殺し（ドラゴンキラー）なんて呼ばれる羽目になっていた。

極め付けが魔力検査で起こった。魔力検査は文字どおり体内の魔力を計測するもの、龍殺し（ドラゴンキラー）事、俺は注目され最高ランクのSだろうと噂されていた。

しかしそこで俺は最低ランクのFだとばれてしまい周りは騒然となった。

別に隠していたわけではない、龍殺し＝凄い魔力を持っていると勘違いされただけだ。

しかし皆は疑問に思うだろう……

そう魔王の息子なのに何で魔力が最低ランクなの？と

お答えしよう！

ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャン！

しるかボケ！こっちが聞きたいくらいだわ！

事故の後遺症らしいんだがな！幼少時代に魔獣に襲われて背中に大きな傷を負った事が原因らしいぜ！らしいってのは俺が事故から前1ヶ月の記憶がないからだ！これも後遺症らしいぜ！普、通魔力は才能によるものが殆どだけど、

努力すれば2ランクぐらい上がるだよ！普通はな！だけど努力したがちつとも魔力が増えなかつたんだよ！（泣）

アル兄さんは文句なしのSランク、一応兄弟なのに……

この事が知れ渡り、Fランクで龍殺し？ ありえなくね？ まぐれじゃね？ まぐれ龍殺し（ドラゴンキラー）と呼ばれる様になったとき！笑いたきゃ笑え！俺だってFランクだと蔑まれるのは覚悟してたが、上げて落とされるのはかなりつらいんだよ！だから半引きこもりになったんだよ！今までの授業をさぼっている理由が半分、これがもう半分だよ！

「おーい！グレイ、戻ってこーい！」

「ハッ」

ライルに頬を叩かれ我に返った。

「お前らの所為で危うくトラウマが開く所だったじゃねーか！」

「わりいわりい、そこまでダメージを負うとはおもわなくてな」

「慰謝料として学食食い放題を求！」

「お前の胃袋で食い放題は俺が破産する！」

「貴族なのに金ないのか？平民の俺より？」

俺はあまり金が無いのだ。一応人間の平民として入学している。社会勉強として平民の暮らしを味わえという事らしい。生活費は充分貰っているが俺の趣味が金がかかり余裕が無いのだ。

「家は下級貴族なの！平民より少し多い位なんだよ！」

「わかつてるわかつてる、じゃ五品まで」

「まあ五品だったら……いいだろ」

「漫才はこれくらいにして、あれ見てみなよ！」

ステイルが笑いながら、勇者の墓の方に指を差す。

「誰が漫才か！」

そう言いながら俺達は勇者の墓の方を向いた。

いつの間にか儀式は始まったいて半数程が儀式を終えていた。そして勇者の墓の前には一人の金髪の美少女が佇んでいた。

彼女の名はアリス・スタットフェルト、容姿端麗、入学試験でぶつ千切りのトップ、魔力検査も文句なしのSランク、はっきり言って完璧超人と言う奴で勇者候補ナンバーワンなのだ。それもそのはず、何故なら彼女は勇者の末裔だからな。

歴代の勇者は合わせて二十人、数十年の間隔を空けて現れた。そして彼女は一番新しい二十代目の末裔なんだ。

勇者として選ばれる理由はよくわかっていないが、勇者の血を継ぐものが選ばれやすいらしい。八代目は二代目の末裔だし、十五代目

は四代目の末裔、十七代目は十代目末裔、十九代目は十一代目でも十一代目は五代目の末裔ときた。もう何が何だか分からないが、四分の一が何かしらの勇者の末裔なので血が関係していると考えるのは普通である。

まあそのせいで血を巡って争い、滅んだ勇者の一族がいるとかいないとか、まことしやかに囁かれている。

今年は初代勇者が現れて千年の大節年、今年は勇者が現れると噂されていた。

そして今年二年生になった彼女が勇者になるのではないかと考えてられているのだ。

彼女の周りは勇者の誕生を今か今かと待ち望んでいる期待の視線を彼女に送っている。

そして彼女が勇者の剣に手を掛ける。

「ゴクン……」

三人は思わず唾を呑み込んだ。

俺が勇者の儀式を待ち侘びていたのもこれを拝むためだ。勇者の誕生なんて一生に一あるかないかだもんな。

周りが固唾を飲む中、彼女はゆっくり剣を握り深呼吸をし、剣を引き抜こうと力を込めた……

しかし、剣はびくともしなかった。

彼女はかなり自信があつたのだろう。大きく目を見開き驚いていた。何度か引き抜こうとするがうんともすんともせず、落ち込んだ様子で儀式を終了した。

周りも落胆の色が見え、教師達まで残念がつていた。

「彼女が無理なら今年は勇者が現れないのかな？」

「そうだろうな」

「いや！俺がまだ残つてる！」

ステイルが質問し、俺が答え、ライルが戯れ言を言った。

「冗談に決まつてるだろ、そう可哀想な人を見る目で見るな！」

「「なんだ冗談か……」」

俺とステイルは同時に言った。

「本気にしたのか？俺をなんだと思つているんだ！」ライルが憤慨しながら聞いてきた。

「「とてつもないバカ？」」

俺とステイルは口を揃えて言った。

「お前ら〜！」

「冗談だ冗談、半分はな……」

俺はライルを宥めながら口にする。

「半分でなんだ！」

「とてつもないはだ」

「俺がバカつて事か？バカつて」

ライルは怒りを顕にして言った。

「そういう事だ」

「よーし表え出る、一年前の決着つけてやろうじゃねーか！」

「望むところだ、この脳筋野郎！」

二人がメンチを切り合っていると、ステイルが間に入って仲裁に入つた。

「まあまあ〜」

「だけどこいつがよ〜」

「こいつがバカなのは事実だし」

「ライルが毎回赤点ぎりぎりなのは事実でしょ？」

「グレイも引きこもりが言えた義理じゃないんじゃない？」

「……はい」

俺とライルはスティルに言いくるめられてしまった。

「ほら、残りは僕達だけだよ？」

いつの間にか殆どの生徒が儀式を終わらせ、俺たち三人だけが残っていた。

勇者の儀式2（後書き）

貯めて投稿した方がいいのかな？難しい〜文才が無くてつらいです
（泣）

俺が勇者！？（前書き）

やっとプロローグが終わったって感じですかね。短いですがお楽しみください。

俺が勇者！？

「じゃあ俺からだな」

ライルが意気揚々と勇者の剣前に立ち、おもいきり引つ張り上げた。

「ふんぬぬぬぬ！」

顔を真っ赤にしながら引つ張るが全く動かない。

「……はあ、びくともしねー」

「お疲れ、じゃ次は僕だね」

ライルが地面にへたり込み、代わりにスティルが剣の前に立つ。

「んっつ！」

スティルが力を込めて引き抜こうとするが、ライル同様びくともしない。

しかしその姿が異様に色っぽい。

「んっつ！……はあはあ……無理みたい……」

膝に手を着いて呼吸するスティルだが、熱っぽく顔を蒸気させて息を荒くする姿が無性にムラムラする……

（つてヤバイ！スティルは男、スティルは男、スティルは男……）

ふう何とか落ち着いた。

ライルも同じ心境だったのか、惚けながらスティルを見守っていたが、突然立ち上がりおもむろにスポンのポケットに手をつ突っ込んでナニやらしている……つておい！

「ライル……お前……」

「いや！あれは仕方ないだろ！」

「何かあったの？」
ステイルがいつの間にか目の前にいた
「何でもありません」「
ライルは自らの保身の為に、俺はライルに同情してそう答えた。

「坊っちゃんまの番ですぞ？」
待ちきれなかったのか、内ポケットに潜んでいたセバスがそう声をかけてきた。

「わかつてるから、安易に喋るな」
「……御意」
注意されてしぶしぶ引っ込むセバス

「最後はグレイだぜ？」「頑張つてね！」
「ああわかつてる」二人に声をかけられ、勇者の剣の前に立つ。
ふと周りに気を配ると……

「あいつ、まぐれ龍殺しじゃね？」「えっあのドラゴンキラー？」
「私初めて見た！」「見た目は普通だな」など口々にする生徒がちらほら、しかし殆どの生徒はアリス・スタットフェルトが無理だった事で興味を無くし内輪で話し込んでいる。！？一瞬視線を感じて視線の方を見るとアリス・スタットフェルトがいてこっちを睨み付けてきた。

しかし俺の視線に気付きそっぽを向いた。
（俺何かしたか？話した事もないはずだが……まあいい、さっさと終わらせるか、どうせ抜けないだろうが……いやまてよ？もし魔王の血に反応して弾かれたら目もあてられなくなるんじゃないかね？ヤバイくね？）

俺は冷や汗をかきながら勇者の剣を見る。
真ん中にはめ込また漆黒の魔石が神々しさの中に不気味さを醸し出す。

俺は息を呑みながらゆっくり剣に手を掛けた

――

（ここはどこだ？さっきまで勇者の剣を抜こうとしてた筈だが？）
俺は見慣れない真っ暗な場所にいた。辺りを見回すが何も無い。あまりに真っ暗な為、上下の感覚すら危うい。

「おいセバス、ここはどこだ？」

内ポケットに話し掛けるが返事は無い。

不信に思い内ポケットを覗いたが内ポケットにはセバスがおらず、空っぽだった

「セバスがいない？……って事はこの空間におれ一人？」

こんな状況ななりながら俺は意外と冷静だった。

（まあセバスに幻術で特訓したあの空間よりましだな。でここは多分あの剣の中だな、俺が触れた瞬間引き込まれたんだ）

俺は冷静にそう分析した

（これからどうなるんだ？このままって訳にもいかないし）
そう悩んでいると突然前方一面にいくつものスクリーンが映しだされた

「うお！？」

反射的に跳び退き、勢いのあまり尻餅を着いてしまった。

「いって腰打った」

腰を擦りながら前を向いた。

「なんだ……これは……」

俺は声を上げずにはいられなかった。

スクリーンに映し出されていたのは邪龍と壮絶な戦いを繰り広げる青年の姿や、大洪水を氷結魔法で凍らせ塞ぎ止める若い男、大飢饉で干ばつした畑に立ち豪雨を降らせる壮年の女、そして数千の魔獣にたった一人で立ち向かう不精髭を生やした30代の男等等、老若男女問わず総勢20人程の人間がそれぞれあらゆる厄災に立ち向かっていった。一見バラバラに思える映像だが一つだけ共通点がある、全員が同じ漆黒の魔石がはめ込まれた剣を持っていたのだ。そう、聖剣エクスカリバーを

「歴代の勇者たち？」

（多分これは歴代の勇者の記憶……いや勇者と共に戦った剣の記憶と言っべきか……しかし何でアレが無いんだ？）

俺が思考の渦に巻き込まれていると、突然空間に亀裂がはしり、亀裂の隙間から目も暗むような光が射してきた。

「まぶしっ！」

俺は反射的に目をつぶった……

—————

痛みを堪えながら再び目をあけると勇者の墓の前に戻っていた。

「何だっただんだ今は……夢か？いや夢にしては有り得ない光景だったし……」

ぶつぶつと独り言を呟いているとふと違和感に気付いた。

（やけに静かだな……）

五百人以上いるこの場所で物音一つしないのだ。

「なあ二人とも、やけに静か過ぎないか？」

二人の方に顔を向け尋ねると二人は……

「おっおまえ……」

「まっまさか……」

ライルは髪の毛まで青くなるんじゃないかというぐらいに顔を真っ青にし、ステイルは鼻眼鏡になっていまにも卒倒しそうだ。

二人は何かに驚く様に、視線を泳がせていた。

「ん？なんだ？どうかしたのか？」

俺は疑問を投げ掛けるが二人はそれ以上言葉を発する事が出来ずにいた。

周りを見渡しても二人と似たり寄ったりの顔をしている

(何がどうしたってんだ？)

すると内ポケットにいるセバスが小さく声をかけてきた

「……坊っちゃんま右手を御覧下さい……」

俺はセバスに言われるがまま右手見る……

そこにはエクスカリバーが握られていた。

「この剣がどうかしたのか？」

「いや、あのそのですね……」

セバスが珍しく歯切れが悪い

「わからんからはつきり言ってくれ」

「ですから……聖剣が抜けています……」

抜が悪そうにセバスが言う

「……」

「……」

「……マジで？」

「……マジでいいます」

おそろおそろ勇者の墓を見る。

墓には剣がない。

そして俺の右手には聖剣がある。

と言う事は？

「「「「俺（お前）が勇者！？」「「「「

ドームに五百人の大合唱が響き渡った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9774z/>

魔王の息子が勇者様！？

2012年1月9日00時49分発行